

皇學館大学研究開発推進センター紀要 第五号
平成三十一年三月一日発行（抜刷）

資料

日本後紀史料（稿）

——延暦十三年——

史料編纂所

日本後紀史料（稿）——延暦十三年——

史料編纂所

日本後紀史料（稿）凡例

- 一、「日本後紀史料（稿）」は、『続日本紀』につぐ勅撰の歴史書『日本後紀』を基軸に、関聯資史料を併載した編年史料集である。対象とするのは、『日本後紀』が網羅する延暦十一年（七九二）より天長十年（八三三）の四十二年間である。
- 一、史料の排列は、先行する『続日本紀史料』を踏襲した。即ち、同一記事では、冒頭に『日本後紀』を置き、以下、原則として『類聚國史』『日本紀略』『扶桑略記』を排し、さらに年代記・記録文書類等の関係史料をほぼ成立年代順に掲げた。
- 一、ただし、『日本後紀』は散逸が甚だしく、現存するのは全四十巻のうち、巻第五・八・十二・十三・十四・十七・二十・二十一・二十二・二十四の十巻であるため、これらの期間については『日本後紀』の記事をそのまま掲げることが可能だが、それ以外の期間については、『類聚國史』『日本紀略』に残る『日本後紀』逸文によった。
- 一、『日本後紀』本文については、三條西家本を底本とし、朝日新聞社本・新訂増補国史大系本・訳注日本史料本などを参照した。
- 一、一々の史料について網文を立て事実の概要を示し、読者の便宜とした。『日本後紀』若しくはその逸文が存する場合はその文に準拠し、并せて『日本紀略』前篇を参照した。それ以外の史料によって網文を立てる場合も、努めて史料中の表現を用いた。
- 一、歴代天皇及び朝廷の記事は、原則として主語を省いた。人名に係る官位・姓は原則として記さないが、薨卒記事には官位・姓を、賜姓記事には姓を附した。
- 一、木簡・金石文等の断片的な史料や、年月日に係けて網文を立てるに至らない史料等は、「雜載」として、是月条または是年条に収めた。
- 一、年紀に諸説があるものや、内容の真偽が定まらないについても広く採録し、注記でその旨を断った。
- 一、引用の史料は、信頼のおける校訂本がある場合はそれにしたがうが、『類聚三代格』『東大寺要録』など、主要な史料については定評のある古写本にあたり、字句を確認した。依拠した写本については、史料名の下に注記した。
- 一、「参考」には、参考とすべき史料を掲出したが、本文掲出は最小限に留め、他は史料の所在を注記するにとどめた。
- 一、上欄見出しは、主に主要用語を掲げ、ほかに便宜、史料を要約して参考に供した。
- 一、史料本文には、可能な限り句読点・返点等を附して、参考に供した。
- 一、編者が注記した文は、首に○を加へて史料のあとに掲げ、また原文中の傍注等には（ ）を施し原文と区別した。その際、煩瑣を厭い、續日本紀史料↓續紀史料、皇學館大学研究開発推進センター紀要↓紀要などの略称を用いた。
- 一、延暦十三年の原稿作成には、荊木美行があたり、校正の点検では京泉勇平氏の協力を得た。

延暦十三年甲戌（七九四年）

正月小盡
乙亥朔

一日（乙亥）宮殿を始めて壞つを以て、廢朝したまふ。

〔類聚國史〕 卷第七十一 歳時二 元日朝賀

十三年春正月乙亥朔。廢朝。以三宮殿始壞一也。

○宮を壞さむとするにより、東院に遷御したまふこと延暦十二年正月二十一日（『紀要』四―60）條參照。

征夷大將軍大伴弟麻呂に節刀を賜ふ。

〔日本紀略〕 前篇十三

甲 十三年正月乙亥朔。賜二征夷大將軍大伴弟磨節刀一。

○征夷大使・副を任せしこと延暦十年十三日（『續紀史料』二十一―618）條、弟磨が辭見すること同十一年閏十一月二十八日（『紀要』三一―114）條參照。

二日（丙子）侍臣を宴し祿を賜ふ。

〔類聚國史〕 卷第七十一 歳時二 元日朝賀

丙子。宴二侍臣。賜レ祿有レ差。

三日（丁丑）任官あり。

〔日本紀略〕 前篇十三

丁丑。任官。

九日（癸未）主鷹司の垣上に雉集る。

〔日本紀略〕 前篇十三

癸未。有_レ雉集_二主鷹司垣上_一。

○雉が禁中の正殿に集りしこと延暦十六年五月十三日條に見ゆ。

十五日（己丑）地震ふ。

〔類聚國史〕 卷第七十一 災異五 地震

十三年正月己丑。地震。

十六日（庚寅）五位以上を宴し祿を賜ふ。

〔類聚國史〕 卷第七十二 歳時三 踏歌

十三年正月庚寅。宴_二五位以上_一。賜_レ祿有_レ差。

征夷の事を山陵に告げたまふ。

〔日本紀略〕 前篇十三

庚寅。告_二征夷事於山陵_一。山階。田原。

○弟麿に節刀を賜ひしこと本月元日條、副將軍坂上田村麻呂らが蝦夷を征ちしこと同年六月十三日條、大伴弟麿が戦果を奏せしこと同年十月二十八日條参照。なほ、本年の征討軍の編成の詳細は弘仁二年五月十九日條に見ゆ。

十七日（辛卯）蝦夷を征せむがために、大中臣諸魚を遣はして伊勢太神宮に奉幣せしむ。

〔日本紀略〕 前篇十三

辛卯。遣_二參議大中臣諸魚奉幣伊勢太神宮_一。爲_レ征_二蝦夷_一也。

○征夷の事を山陵に告げしこと本月十六日條に見ゆ。

二十日(甲午)右大臣藤原繼繩、奉獻す。樂を奏し五位已上に衣被を賜ふ。

〔類聚國史〕 卷第七十八 奉獻 獻物

十三年正月甲午。右大臣從二位藤原朝臣繼繩奉獻。奏樂。賜五位已上衣被。

二十一日(乙未)射を東埒殿に觀たまふ。

〔類聚國史〕 卷第七十二 歲時三 射禮

十三年正月乙未。觀射於東埒殿。

二十五日(己亥)栗前野に遊獵したまふ。

〔類聚國史〕 卷第三十二 帝王十二 天皇遊獵

十三年正月己亥。遊獵於栗前野。

二十六日(庚子)端野に遊獵したまふ。

〔類聚國史〕 卷第三十二 帝王十二 天皇遊獵

庚子。遊獵於瑞野。是日。大雪。

大雪なり。

〔類聚國史〕 卷第三十二 帝王三十二 天皇遊獵

庚子。(中略)是日。大雪。

二月大盡
甲辰朔

十三日（丙辰）葛野に遊獵したまふ。

〔類聚國史〕 卷第三十二 帝王十二 天皇遊獵

二月丙辰。遊_レ獵于葛野。

十四日（丁巳）内豎二百六十人を考に預らしむ。

〔弘仁格抄〕 上格 卷三

令_レ應預_レ考内豎貳佰陸拾人 同十三年二月十四日

二十二日（乙丑）五位已上を宴し物を賜ふ。

〔類聚國史〕 卷第三十二 帝王十二 天皇遊宴

十三年二月乙丑。宴_三五位已上。賜_レ物有_レ差。

二十七日（庚午）水生野に遊獵したまふ。

〔類聚國史〕 卷第三十二 帝王十二 天皇遊獵

庚午。遊_レ獵於水生野。

三月小盡
甲戌朔

三日 (丙子) 南園に宴し五位已上に祿を賜ふ。

〔類聚國史〕 卷第七十三 歲時四 三月三日

十三年三月丙子。宴_二於南園。賜_二五位已上祿_一有_レ差。

四日 (丁丑) 大原野に遊獵したまふ。

〔類聚國史〕 卷第三十二 帝王十二 天皇遊獵

三月丁丑。遊_二獵於大原野_一。

五日 (戊寅) 少僧都等定らを豊前國八幡・筑前國宗形・肥後國阿蘇の三神社に遣はして讀經せしめ、三神の爲に七人を度す。

〔類聚國史〕 卷第五 神祇五 八幡大神

桓武天皇延暦十三年三月戊寅。遣_下少僧都傳燈大法師位等定等於豊前國八幡。筑前國宗形。肥後國阿蘇三神社_上讀經。爲_二三神_一度_二七人_一。

十八日 (辛卯) 石淵王らを伊勢太神宮に遣はして、幣帛を奉らしむ。

〔類聚國史〕 卷第三 神祇三 伊勢太神

十三年三月辛卯。遣_下大監物從五位上石淵王。參議從四位上守兵部卿兼近衛大將行神祇伯近江守大中臣朝臣諸魚等_上奉_中幣帛於伊勢太神宮_上。

四月小盡
癸卯朔

一日（癸卯）日、蝕すること有り。

〔日本紀略〕前篇十三

夏四月癸卯朔。日有蝕。

○底本「癸未」に作るも、この月「癸未」なければ、逸史により改む。

二十八日（庚午）新京を巡覽したまひ、右大臣藤原繼繩高橋津莊に還御し宴飲して五位已上に衣を賜ふ。

〔類聚國史〕卷第三十二 帝王十二 天皇遊宴

四月庚午。巡覽新京。還御右大臣從二位藤原朝臣繼繩高橋津莊宴飲。賜五位已上衣。

高橋津莊

〔日本紀略〕前篇十三

庚午。巡覽新京。

是月 雜載

〔太政官牒〕○太政官牒○東南院文書一ノ七

太政官牒 僧綱并東大寺三綱

應出藥伍種

甘草〔證〕伍斤 大黃〔證〕伍斤 人參〔證〕貳斤

呵梨勒〔證〕壹伯丸 檳榔子〔證〕壹伯丸

使宮内卿從四位上石上朝臣家成 從陸人

刑部少輔從五位下紀朝臣梶繼 從肆人

藤原小黒麻呂に給はんが
ために、東大寺本庫より
薬五種を出さしむ

内薬侍醫外從五位下清道連岡麻呂 從參人

牒、被^{（藤原種純）}右大臣宣僞、奉 勅、爲出充大納言藤原朝臣小黒麻呂之買給藥、宜遣件人等
者、依宣發遣如件、但其價者即納本庫、故牒、

延曆十三年四月廿五日 正七位下守左少史武生宿禰「眞象」□

從四位下行左中辨兼近衛少將相模守藤原朝臣「繩主」○「太政官
印」十七アリ

五月大盡
壬申朔

六日(丁丑) 大軍を發するを以て、馬射を停む。侍臣を宴し祿を賜ふ。

〔類聚國史〕 卷第七十三 歲時四 五月五日

十三年五月丁丑。停馬射。以發大軍也。宴侍臣賜祿。

○本年の征討軍の編成の詳細は弘仁二年五月十九日條に見ゆ。

二十四日(乙未) 甲斐國、白鳥を獻ず。

〔類聚國史〕 卷第百六十五 祥瑞上 鳥

十三年五月乙未。甲斐國獻白鳥。

〔日本紀略〕 前篇十三

五月乙未。甲斐國獻白鳥。

○白鳥が中瑞に當たりしこと『延喜式』卷二十一、治部省に見ゆ。

二十八日(己亥) 帶子皇太子妃、忽ち病を有し木蓮子院に移り頓逝す。

〔日本紀略〕 前篇十三

己亥。皇太子妃諱帶子忽有_レ病。移_二木蓮子院_一。頓逝。

【参考】

〔延喜式〕 卷二十一、諸陵寮

河上陵 贈皇后藤原氏。在_二大和國添下郡_一。兆
域東西四町。南北四町。守戸五烟。

(中略)

右五遠陵

○詔して妃諱帶子に皇后を追贈せしこと大同元年六月九日條に見ゆ。これより五月二十七日を國忌とせしも、のち藤原緒嗣の請ひにより國忌より除かれしこと弘仁八年五月己酉(二十一日)條に見ゆ。

是月 雜載

〔大和國弘福寺文書目録〕

○大和國弘福寺文書目録

○圓満寺文書・根津美術館所蔵文書

〔弘福寺領田畠流記〕

合檢收公文拾貳卷 又拾壹枚

水陸田目録一卷二枚 踏官印、和銅二年

□□□□卷□□□□

同國同郡畠相換牒一卷二枚 踏國印、寶龜五年

石樋池處代田施入牒一卷三枚

一枚大和國司踏國印、一枚民部省踏省印、

一枚國符十市郡司白紙 並寶龜八年

攝津・播磨・紀伊國田券文一卷卅二枚 踏國印、自勝寶元年迄

寶龜八年、

□□□□一卷踏國印、寶字元年

大修多羅供財物施入勅書一卷二枚 踏内印、感寶元年

御帶等施入勅書一卷二枚 踏國印、勝寶八年

大修多羅供田券文一卷十枚

二枚合紀伊國踏國印、二枚合播磨國踏國郡印 并勝寶五年

弘福寺、公文拾貳卷・拾壹枚を檢取す

六枚近江國^{〔合〕}二枚踏國印、自天平三年迄寶字二年、

播磨國揖保郡畠券一枚^{〔合〕}踏郡印、景雲元年

常修多羅衆田籍一卷^{〔合〕}二枚^{〔合〕}踏僧綱印、寶龜四年

同田施入書一枚^{〔合〕}天平六年

讚岐國田白圖一卷^{〔合〕}副郡司牒二枚、

大和高市郡田白圖一卷^{〔合〕}延曆六年班田司案

同郡寺廻田畠白圖二枚^{〔合〕}一枚和銅五年官定

一枚延曆十年郡案寫

同國山邊郡田白圖一枚^{〔合〕}

美濃國田白圖二枚

山背國田畠白圖一枚^{〔合〕}

河內國田白圖一枚^{〔合〕}

同國野地白圖一枚^{〔合〕}

別三論供田券文等一卷^{〔合〕}五枚

二枚白紙 三枚踏國印、

寺縁起財帳一卷^{〔合〕}天平十九年

延曆十三年五月十一日小都維那入位僧「隆信」

上座滿位僧「覺崇」

寺主滿位僧「徳安」

都維那住位僧「明開」

小寺主入位僧「隆吉」

可信滿位僧「善永」

可信満位僧「妙誨」

可信満位僧^病

檢收僧綱使

威儀師「常耀」 從儀師「璟仙」

從儀師 ○「弘福寺印」

三十八アリ

六月小盡
壬寅朔

十三日（甲寅）地震ふ。

〔類聚國史〕 卷第一百七十一 災異五 地震

六月甲寅。地震。

〔日本紀略〕 前篇十三

六月甲寅。地震。

副將軍坂上田村麻呂已下、蝦夷を征つ。

〔日本紀略〕 前篇十三

六月甲寅。（中略）副將軍坂上大宿禰田村磨已下征蝦夷。

○田村麻呂が征東副使に任ぜられしこと延暦十年七月十三日〔續紀史料〕二十一618條、征夷副使として辭見せしこと同十二年二月二十一日〔紀要〕四168條參照。

十五日（丙辰）少納言・外記をして、官符の入りし日に細しく勘へ後日に捺印せしむ。

〔類聚符宣抄〕 第十六 請印事・外記職掌

請印官符事

右官符。少納言外記加覆勘。後日捺印。而即日捺頓不能勘。自今以後宜入日細勘。後日捺印。當番案主亦宜知之。

延暦十三年六月十五日

案主

二十一日（壬戌）肥前國、白雀を獻ず。

〔類聚國史〕 卷第百六十五 祥瑞上 雀

十三年六月壬戌。肥前國獻_二白雀_一。

○白雀が中瑞に當たりしこと『延喜式』卷二十一、治部省に見ゆ。

二十二日（癸亥）任官あり。

〔日本紀略〕 前篇十三

癸亥。任官。

二十五日（丙子）諸國の夫五千を發して新宮を掃はしむ。

〔日本紀略〕 前篇十三

丙子。發_二諸國夫五千_一掃_二新宮_一。

○是月「丙子」の干支无ければ、恐らくは甲子（二十三日）・丙寅（二十五日）の誤りなるべし。

七月大盡
辛未朔

一日(辛未)東西の市を新京に遷し、且つ厘舎を造りて市人を遷す。

〔日本紀略〕 前篇十三

七月辛未朔。遷東西市於新京。且造厘舎。且遷市人。

大納言正三位勳二等中務卿皇后大夫藤原朝臣小黒麻呂薨す。

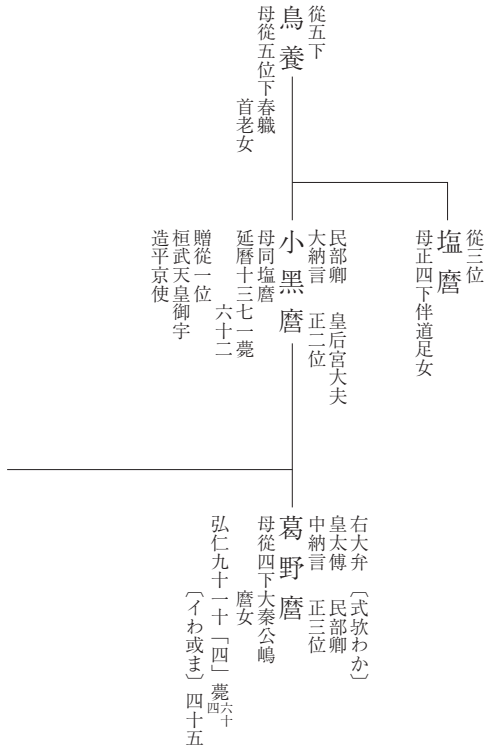
〔公卿補任〕

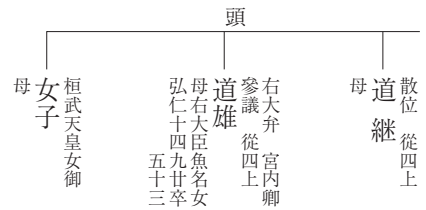
大納言 正三位勳二等

同小黒磨六十

中務卿。皇后宮大夫。七月一日薨。贈從二位。勞五年。三木六年。中納言七年。

〔尊卑分脉〕 藤氏大祖傳・本系 ○略表記





【参考】

〔正倉院寶物〕 北倉一七〇 ○出入帳〔『大日本古』四一198〕

寶龜九年五月十八日下琵琶貳面

止螺鈿紫檀琵琶一面 緑地書桿撥納紫綾袋淺緑臈纈裏紅撥鏤撥

紫檀琵琶一面 緑地書桿撥納紫綾袋緋綾裏

右。獻内裏如件

〔別巻〕
十年十二月六日返上已了 使從四位上行右衛士督兼常陸守藤原朝臣小黒麿

使從四位上行右衛士督兼常陸守藤原朝臣小黒麻呂

右少弁從五位下守紀朝臣 古 佐 美

造寺司大判官正六位上山口忌寸 嶋 足

少判官正六位上柿本朝臣 猪 養

少判官正六位上勲十一等高松連内弓

主典從六位下勲十一等大和連虫麻呂

○正倉院檢校使に任ぜられしこと同十年十二月六日〔『大日本古』四一199〕條に見ゆ。尚、正倉院文書には、寶龜九年・十年の小黒麿を「右衛士督兼常陸守」としていることから、同八年十月十三日〔『續紀史料』十七一476〕條の「參議」は誤りか。

右衛士督兼常陸守藤原朝臣小黒麿

〔多度神宮寺伽藍縁起資財帳〕 ○多度神宮寺伽藍縁起資財帳○村山龍平氏所藏文書

桑名郡多度寺鎮三綱謹牒上

神宮寺伽藍縁起并資財帳

(中略)

伊勢國桑名郡幡樺嶋東庄墾田并田代

始自一條辰田里十二坪并廿五町 始自同條二土入里一坪并卅六町

始自三姫嶋里一坪至于廿坪并廿一町

合墾田并田代捌拾町肆段參伯肆拾歩 大納言正三位 藤原雄黑施入

(中略)

延曆廿年十一月三日 願主沙彌「法教」

鎮修行住位僧「賢中」

知事修行入位僧病

(後略)

〔類聚国史〕 卷六十六 人部 薨卒四位

弘仁十二年三月庚申。(中略)

廿四十三年二月丙戌。散位從四位下藤原朝臣道繼卒。道繼者。從五位下鳥養之孫。贈從二位大納言小黑麻呂之第二子也。才能不聞。武藝小得。好酒及鷹。老而彌篤。時年六十七。

〔文德天皇實錄〕 卷九 天安元年四月條

七甲戌。无品滋野内親王薨。親王者。桓武天皇第七女也。母大納言正三位勳四等藤原朝臣小黑麻呂之女。正五位下上子也。親王容色妖艷。不_レ免_二淇上之譏_一。

桓武天皇第七女滋野内親王の母は小黑麻呂の女

道繼は小黑麻呂の第二子

雄黑、施入す

○その他、押勝の亂の功により従五位下を加へ賜ひしと天平寶字八年十月七日(『續紀史料』十三一154)條、伊勢守に任ぜられしこと同八年十月二十日(『續紀史料』十三一170)條、紀伊行幸の御後次第司次官に任ぜられしこと天平神護元年十月十三日(『續紀史料』十三一347)條、式部の少輔に任じられしこと神護景雲元年三月二十日(『續紀史料』十四一330)條、安藝守に任ぜられしこと同二年二月十八日(『續紀史料』十五一17)條、従五位上を授けられしこと寶龜元年十月一日(『續紀史料』十六一11)條、他戸新王を皇太子とし、併せて小黒麿に正五位下を授けられしこと同二年正月二十三日(『續紀史料』十六一68)條、中衛少將にして美濃守に任ぜられしこと同二年閏三月一日(『續紀史料』十六一133)條、上野守に任ぜられしこと同二年五月十四日(『續紀史料』十六一154)條、従四位下を授けられしこと同四年十月三日(『續紀史料』十六一703)條、右衛士督に任ぜられしこと同七年三月六日(『續紀史料』十七一328)條、正倉院へ勅使として派遣されしこと同七年九月二十一日(『續紀史料』二十一116)條、出雲守に任ぜられしこと同八年三月二十九日(『續紀史料』十七一417)條、參議右衛士督にして常陸守に任ぜられしこと同八年十月十三日(『續紀史料』十七一476)條、従四位上を授けられしこと同九年正月十六日(『續紀史料』十八一6)條、參議に任ぜられしこと同十年十二月三十日(『續紀史料』十八一260)條、正四位上を授け、持節征東大使に任ぜられしこと同十一年九月二十三日(『續紀史料』十八一353)條、參議正四位下にして陸奥按察使に任ぜられ、右衛士督・常陸守もとの如きこと天應元年正月十日(『續紀史料』十八一500)條、參議陸奥按察使にして兵部卿に任ぜられしこと同元年五月七日(『續紀史料』十八一543)條、參議持節征東大使兵部卿正四位下兼陸奥按察使常陸守小黒麿らに勅すること同元年六月一日(『續紀史料』十八一556)條、民部卿に任ぜられ陸奥按察使もとの如きこと同元年七月十日(『續紀史料』十八一587)條、征伐の事畢りて入朝し、特に正三位を授けられしこと同元年(『續紀史料』十八一594)條、光仁天皇の崩御にさいし、御裝束司に任ぜられしこと同元年十二月二十三日(『續紀史料』十八一641)條、誅人を率ゐて誅を奉りしこと延暦元年正月六日(『續紀史料』十九一1)條、民部卿正三位にして陸奥按察使に任ぜられしこと同元年二月七日(『續紀史料』十九一20)條、參議民部卿正三位にして左京大夫に任ぜられしこと同二年七月二十五日(『續紀史料』十九一175)條、中納言に任ぜられしこと同三年正月十六日(『續紀史料』十九一218)條、種繼らとともに遷都がための地を相さしむこと同三年五月十六日(『續紀史料』十九一245)條、中納言正三位にして中務卿に任ぜられしこと同四年七月六日(『續紀史料』十九一367)條、廢太子を告げんがために、笠王とともに山科山陵に遣はされしこと同四年十月八日(『續紀史料』十九一445)條、中納言正三位にして美作守に任ぜられ中務卿もとの如きこと同六年二月五日(『續紀史料』二十一92)條、夫人藤原朝臣旅子の喪事を監護すること同七年五月四日(『續紀史料』二十一199)條、中納言正三位にして皇后宮大夫に任ぜられ中務卿・美作守もとの如きこと同七年七月二十五日(『續紀史料』二十一216)條、征東將軍ら逗留して敗軍せし状を勘問せしめんがために太政官曹司に遣はせしこと同八年九月十九日(『續紀史料』二十一352)條、中宮高野新笠の崩御に際し、壹志濃王らとともに山作司に任ぜられしこと同八年十二月二十九日(『續紀史料』二十一378)條、誅人を率ゐて誅を奉りしこと同九年正月十四日(『續紀史料』二十一394)條、繼繩らとともに周忌御齋會司に任ぜられしこと同月二十六日(『續紀史料』二十一397)條、大納言に任ぜられしこと同九年二月二十七日(『續紀史料』二十一409)條、皇后乙牟漏の崩御にさいし、壹志濃王らとともに山作司に任ぜられしこと同九年閏三月十一日(『續紀史料』二十一430)條、奉獻せしこと同十一年正月二十八日(『紀要』三一78)條、遷都のための地を相さしめんがために、紀古佐美らとともに山背國葛野郡宇太村に遣はされしこと同十二年正月十五日(『紀要』四一59)條、奉獻せしこと同月二十七日(『紀要』四一62)條、正倉院の雜葉を給せられしこと本年四月是月雜載條參照。

九日（己卯）新京家を作らんがため、百濟王明信らに、山背・河内・攝津・播磨等の國稻を賜ふ。

〔類聚國史〕 卷第七十八 賞宴下 賞賜

十三年七月己卯。以_三山背。河内。攝津。播磨等國稻一万一千束。賜_二從三位百濟王明信。從四位上五百井女王。從五位上置始女王。從四位上和氣朝臣廣虫。因幡國造淨成女等十五人。爲_レ作_二新京家_一也。

十日（庚辰）宮中と京畿の官舎・人家震ふ。或ひは震死者有り。

〔日本紀略〕 前篇十三

庚辰。震_二于宮中并京畿官舎及人家_一。或有_二震死者_一。

八月大盡
辛丑朔

五日(乙巳) 安房國疫す。

〔類聚國史〕 卷第七十三 災異七 疾疫

十三年八月乙巳。安房國疫。

十日(庚戌) 大原野に遊獵す。

〔類聚國史〕 卷第三十二 帝王十二 天皇遊獵

庚戌。遊獵于大原野。

十三日(癸丑) 藤原繼繩ら勅を奉りて國史を修すこと成る。闕に詣でて排表す。

〔類聚國史〕 卷第四百十七 文部下 國史 續日本紀

桓武天皇延曆十三年八月癸丑。右大臣從二位兼行皇太子傳中衛大將藤原朝臣繼繩等奉_レ勅修_二國史_一成。詣闕拜表曰。臣聞。黃軒御_レ曆。沮誦攝_二其史官_一。有周闢_レ基。伯陽司_二其筆削_一。故墳典斯闡。步驟之蹤可_レ尋。載籍聿興。勸沮之議允備。暨_下乎班馬迭起述_二實錄於西京_一。范謝分_レ門。騁_中直詞於東漢_上。莫_レ不_下表_レ言旌_レ事。播_二百王之通猷_一。昭_レ德塞_レ違。垂_中千祀之烟光_上。史籍之用。蓋大矣哉。伏惟聖朝。求_レ道纂_レ極。貫_二三才_一而君臨。就_レ日均_レ明。掩_二八州_一而光宅。遠安邇樂。文軌所以大同。歲稔時和。幽顯於_レ焉禔福。可_レ謂英聲冠_二於胥陸_一。懿德跨_二於助華_一者焉。而貞辰高居。凝_レ旒廣慮。修_二國史之墜業_一。補_二帝典之缺文_一。爰命_二臣與_三正五位上行民部大輔兼皇太子學士左兵衛佐伊豫守臣菅野朝臣眞道。少納言從五位下兼侍從守右兵衛佐行丹波介臣秋篠朝臣安人等。銓_二次其事_一。以繼_二先典_一。若夫襲山肇_レ基以降。淨原御寓之前。神代草昧之功。往帝庇民之略。前史所_レ著。粲然可_レ知。降_レ自_二文武天皇_一。訖_二于聖武皇帝_一。記注不_レ味。餘烈存焉。但起_レ自_二寶字_一。至_二于寶龜_一。廢帝受禪。樞_二遺風於簡策_一。南朝登祚。闕_二茂實於洛誦_一。是以故中納言從三位兼行兵部卿石川朝臣名足。主計頭從五位下上毛野公大川等。奉_レ詔編緝。合成_二廿卷_一。唯存_二案牘_一。類無_二綱紀_一。

臣等更奉^二天勅^一。重以討論。芟^三其蕪穢^一。以撮^二機要^一。摭^三其遺逸^一。以補^二闕漏^一。刊^三彼此之枝梧^一。矯^二首尾之差違^一。至^レ如^二時節恒事^一。各有司存。一切詔詞。非^レ可^レ爲^レ訓。觸^レ類而長。其例已多。今之所^レ修。並所^レ不^レ取。若其蕃國入朝。非常制勅。語關^二聲教^一。理畝^二勸懲^一。摠而書^レ之。以備^二故實^一。勅成^二二十四卷^一。繫^三於前史之末^一。其目如^レ左。臣等學謝^二研精^一。詞慙^二質辨^一。奉^レ詔淹^レ歲。伏深戰兢。有^レ勅藏^二于秘府^一。

〔日本紀略〕 前篇十三

八月癸丑。右大臣兼皇太子傳中衛大將藤原繼繩等奉^レ勅修^二國史^一成。詣^レ闕拜表曰。云々。

○この時撰進せられし國史は、現行『續日本紀』の卷二十一（天平宝字二年八月）より卷三十四（寶龜八年十二月）に至る十四卷と思はれ、六卷を追加して後半を二十卷とし、前半二十卷を合わせて撰上せしこと延暦十六年二月十三日條參照。

十六日（丙辰）大原野に遊獵したまふ。

〔類聚國史〕 卷第三十二 帝王十二 天皇遊獵

丙辰。遊^二獵于大原野^一。

是 月 雜載

〔興福寺官務牒疏〕

普賢寺。在^二同州綴喜郡筒城郷朱智長岡莊^一。（中略）延暦十三年八月十三日始炎上。天台延暦義眞再起。至^二中程^一入寂。

綴喜郡の普賢寺炎上す

九月小盡
辛未朔

一日（辛未）地震ふ。

〔類聚國史〕 卷第七十一 災異五 地震

九月辛未朔。地震。

二日（壬申）地震ふ。

〔類聚國史〕 卷第七十一 災異五 地震

壬申。地震。

三日（癸酉）仁王經を講ずるにより、諸國に三日の内殺生を禁斷せしむ。

〔類聚國史〕 卷第七十七 佛道四 仁王會

桓武天皇延暦十三年九月癸酉。令_下天下諸國三日之内禁斷殺生_上。以_レ講_二仁王經_一也。

〔日本紀略〕 前篇十三

九月癸酉。令_下天下諸國三日之内。禁斷殺生_上。以_レ講_二仁王經_一也。

十五日（乙酉）任官あり。

〔日本紀略〕 前篇十三

乙酉。任官。

二十二日（壬辰）交野に遊獵したまふ。

〔類聚國史〕 卷第三十二 帝王十二 天皇遊獵

九月壬辰。遊獵于交野。

二十八日（戊戌）新都に遷る及び蝦夷を征せんと欲するにより、諸國名神に幣帛を奉る。

〔日本紀略〕 前篇十三

戊戌。奉幣帛於諸國名神。以下遷于新都。及欲征蝦夷也。

○蝦夷を征せんがために伊勢太神宮に奉幣せしこと本年正月十七日條參照。

二十九日（己亥）百の法師を請ひて、仁王經を新宮に講ず。

〔類聚國史〕 卷第七十七 佛道四 仁王會

己亥。請百法師。講仁王經於新宮。

〔日本紀略〕 前篇十三

己亥。請百法師。講仁王經於新宮。

是月 雜載

〔山家最略記〕

一傳教大師以止觀院本尊稱三藐三菩提佛事（中略）

口決云。件御祈願。延曆十三年九月三日中堂供養。自同日初夜七日御參籠中堂。結願之時祈願之文也。世流布詠云。吾立云云。仙文字者。弘仁十四年。修理筆師山田福吉所進字也。

口決云

十月大盡
庚子朔

五日（甲辰）新京に幸せんとするにより装束司・次第司を任ず。

〔日本紀略〕 前篇十三

十月甲辰。任_レ装束司次第司。以_レ將_レ幸_二新京_一也。

○装束司・次第司については『延喜式』卷十一、太政官、行幸條參照。

十日（己酉）勅して、有位の人は本位の上に本第の階を計へて更に加叙したまふ。

〔令集解〕 卷第十七 選敘令 秀才出身條

有位之人。於_二本位上_一。計_二本第階_一更加叙之。一依_二去延曆十三年十月十一日格_一。

延曆十三年十月十一日官符云。應_下出身得第。本位上加_二本第_一叙_上事。

〔弘仁格抄〕 上 格卷二

應_下出身得第本位上加_二本第_一叙_上事 延曆十三年十月十日

【参考】

〔令義解〕 卷第四 選敘令 秀才出身條

凡秀才出身。上上第正八位上。上中正八位下。明經上上第正八位下。上中從八位上。進士甲第從八位下。乙第及明法甲第大初位上。乙第大初位下。其秀才明經得_二上中以上_一。有_二蔭及孝悌被_二表頭者_一。加_二本蔭本第一階_一叙。〔注文略〕其明經。通_二二經_一以外。每_二一經_一通加_二二等_一。〔注文略〕

〔令集解〕 卷第十七 選敍令 秀才出身條

宝龜二年閏三月十五日勅。自今之後。有位見_レ試以及第者。同階以上加_二一等_一叙之。

十一日（庚戌）越前國の人船木安麻呂、志を遂げずに亡せし父にかはり造宮料に供す。

〔類聚國史〕 卷第七十八 奉獻 獻物

冬十月庚戌。越前國人船木直安麻呂言。父外從五位下馬養爲_レ供_二公事_一。収_二米一千斛_一。而未_レ遂_二其志_一。不幸早亡。伏望所_レ収之物。供_二造宮料_一。亡父之情。泉壤有_レ悦。許_レ之。

公事に供さんが爲に米一千斛を収む

十三日（壬子）交野に遊獵したまひ、百濟王らに物を賜ふ。

〔類聚國史〕 卷第三十二 帝王十二 天皇遊獵

十月壬子。遊_二獵於交野_一。賜_二百濟王等物_一。

二十二日（辛酉）車駕、新京に遷る。

〔類聚國史〕 卷第七十八 奉獻 獻物

辛酉。車駕遷_二于新京_一。

〔日本紀略〕 前篇十三

辛酉。車駕遷_二于新京_一。

〔鴨脚秀文文書〕

延暦十三年甲戌十月辛酉。遷_二新都_一。下_レ詔号_二平安京_一者。

〔拾芥抄〕 宮城部

同十三年冬十月廿三日。天皇自_(つゝ)南京。遷_(つゝ)北京。

〔元亨积書〕 卷第二十三 資治表四 桓武

十有三年。春。夏。秋。冬十月辛酉。遷_(つゝ)都山州平安城。

延曆十三年。十月遷都。二十一也。

○小黑磨らに遷都がための地を相さしむこと延曆十二年正月十五日〔紀要〕四一59) 條、遷都を賀茂大神に告げしめしこと同年二月二日〔紀要〕四一63) 條、新京を巡覽したまふこと同年三月一日〔紀要〕四一71) 條、遷都の由を山陵に告ぐること同年三月二十五日〔紀要〕四一74) 條、新宮の諸門を造らしめしこと同年六月二十三日〔紀要〕四一102) 條、東西の市を新京に遷せしこと延曆十三年七月一日條參照。

二十五日(甲子) 造宮使・山背國奉獻し、五位已上に衣被・笠・産業の器物を賜ふ。

〔類聚國史〕 卷第七十八 奉獻 獻物

甲子。造宮使及山背國奉獻。賜_(つゝ)五位已上衣被并笠及産業器物。詔曰云々。_{(事具_(つゝ)京都部_(つゝ))}

二十六日(乙丑) 近江國、物を獻ず。

〔類聚國史〕 卷第七十八 奉獻 獻物

乙丑。近江國獻_(つゝ)物。

二十七日(丙寅) 攝津・河内二國、物を獻ず。

〔類聚國史〕 卷第七十八 奉獻 獻物

丙寅。攝津河内二國獻_(つゝ)物。

二十八日(丁卯) 征夷將軍大伴弟麿奏上して、首四百五十七級を斬り、百五十人を捕虜とし馬八十五疋を獲り、七十五處を焼落すといふ。

〔日本紀略〕 前篇十三

丁卯。征夷將軍大伴弟麿奏。斬首四百五十七級。捕虜百五十人。獲馬八十五疋。燒落七十五處。

○弟麿に劔刀を賜ひしこと正月元日條、副將軍坂上田村麻呂らが蝦夷を征つこと同年六月十三日條參照。尚、弘仁二年五月十九日條に本年の征討軍の編成のこと見ゆ。

近郡なるを以て松尾神に階を加ふ。

〔日本紀略〕 前篇十三

丁卯。(中略) 鴨。松尾神加階。以近郡也。

位を授くることあり。

〔日本紀略〕 前篇十三

丁卯。(中略) 授位。

○藤原繼繩・紀古佐美・壹志濃王・神王・大中臣諸魚らが授位せられしこと本年是歲雜載條所引の『公卿補任』參照。なほ、『公卿補任』は授位を二十七日のこととす。

任官あり。

〔日本紀略〕 前篇十三

丁卯。(中略) 任官。

○古佐見・神王・壹志濃王が中納言、藤原内磨・眞友・乙叡が參議に任ぜられしこと本年是歲雜載條所引の『公卿補任』參照。なほ、『公卿補任』は任官を二十七日のこととす。

都を遷して詔したまふ。

〔日本紀略〕 前篇十三

丁卯。（中略）遷都。詔曰。云々。葛野乃大宮地者。山川毛麗久四方國乃百姓乃參出來事毛便之豆云々。

詔して、愛宕・葛野二郡の今年の田租を免じたまふ。

〔類聚國史〕 卷第八十三 政理五 免租税

十三年冬十月丁卯。詔曰云々。又愛宕葛野二郡乃今年田租免賜止宣布勅命乎衆聞食止宣。事具三京都部二

三十日（己巳）和泉國、物を獻ず。

〔類聚國史〕 卷第七十八 奉獻 獻物

己巳。和泉國獻物。

十一月大盡
庚午朔

二日（辛未）北岡に遊獵したまふ。

〔類聚國史〕 卷第三十二 帝王十二 天皇遊獵

十一月辛未。遊獵於北岡。

七日（丙子）詔して、大學寮田二十町に越前國水田一百二町を加へ、勸學田と名づけたまふ。

〔類聚國史〕 卷第百七 職官十二 大學寮

桓武天皇延曆十三年十一月丙子。詔曰云々。其去天平寶字元年所置大學寮田二十町。生徒稍衆。不足供費。宜更
更加越前國水田一百二町。通前一百二十餘町。名曰勸學田云々。事具勸學田部。

天平寶字元年に大學寮田
を置く

〔日本紀略〕 前篇十三

十一月丙子。詔曰。古之王者。教學爲先云々。去天平寶字元年所置大學寮田廿町。生徒稍衆。不足供費。宜更
加置越前國水田一百二町。通前一百廿餘町。名曰勸學田云々。

〔類聚三代格〕 卷十五 諸司田事

越前國水田二百二町五段百六十九步

勅。古之王者教學爲先。訓世垂風莫不由此。朕留心膠序。屬想儒宗。修鄒魯之前蹤。弘洙泗之往烈。而經
藉之道于今未降。好學之徒無聞焉。今蓋簞食瓢飲非性所安。鼓篋橫經中途而止。永言其弊。情深興復。其去
天平寶字元年所置大學寮田卅町。生徒稍衆不足供費。宜更置前件水田通前一百卅餘町。名曰勸學田。瞻
給生徒。令遂其業。庶崑墟之璞藉。瑑磨而騰輝。稽峯之箭資。括羽而增美。然後採擇英髦。用秉庶績。論
其弘益。豈不大哉。

延暦十三年十一月七日 類聚國史第百七

〔弘人格抄〕 下 格卷第七

勅

延暦十三年十一月七日

○大學寮をはじめ諸司に公廨田を置き、諸生の供給に用ひしこと天平寶字元年八月二十三日〔續紀史料〕十下170 條參照。
なほ、勸學田の変遷についても、同條掲出の參考文獻と注文を參照のこと。

八日(丁丑)詔して、山背國を改めて山城國と爲したまふ。また、平安京と號け、近江國滋賀郡古津を大津と稱す。

〔日本紀略〕 前篇十三

丁丑。詔。云々。山勢實合_三前聞_一。云々。此國山河襟帶。自然作_レ城。因_三斯形勝_一。可_レ制_三新號_一。宜_下改_三山背國_一。爲_{中山}城國_上。又子來之民。謳歌之輩。異口同辭。號曰_三平安京_一。又近江國滋賀郡古津者。先帝舊都。今接_三輩下_一。可_下追_三昔號_一改稱_中大津_上。云々。

九日(戊寅)康樂岡を遊獵したまふ。

〔類聚國史〕 卷第三十二 帝王十二 天皇遊獵

戊寅。遊_レ獵於康樂岡_一。

十日(己卯)伊勢・美作兩國、物を獻ず。

〔類聚國史〕 卷第七十八 奉獻 獻物

十一月己卯。伊勢美作兩國獻_レ物。

十七日（丙戌）美濃但馬二國、物を獻ず。

〔類聚國史〕 卷第七十八 奉獻 獻物

丙戌。美濃但馬二國獻物。

二十六日（乙未）左京の人海上眞直、下獄して死す。

〔類聚國史〕 卷第八十七 刑法一 斷罪

大宰少貳從五位上三狩
の男
宿怨
父妾婢を殺す

十三年十一月乙未。左京人海上眞直下獄死。眞直。故大宰少貳從五位上三狩之男。以宿怨殺父妾婢一人。

二十九日（戊戌）播磨國、物を獻ず。

〔類聚國史〕 卷第七十八 奉獻 獻物

戊戌。播磨國獻物。

十二月大盡
庚子朔

二日(辛丑) 齋宮寮、物を獻じ、曲宴して助三嶋年繼らに位を授く。

〔類聚國史〕 卷第三十二 帝王十二 天皇遊宴・卷第七十八 奉獻 獻物

十二月辛丑。齋宮寮獻物。曲宴。助正六位上三嶋真人年繼。齋内親王乳母无位朝原忌寸大刀自授從五位下。

十二月辛丑。齋宮寮獻物。曲宴云々。事具京
都部。

七日(丙午) 越前國物を獻ず。

〔類聚國史〕 卷第七十八 奉獻 獻物

丙午。越前國獻物。

十一日(庚戌) 山城國の乙訓社の佛像を大原寺に遷し置く。

〔日本紀略〕 前篇十三

十二月庚戌。遷置山城國乙訓社佛像於大原寺。初西山採薪人休息此社。便刻木成佛像。稱有神驗。衆庶會集驚耳目。故遷。

十七日(丙辰) 大原野に遊獵したまふ。

〔類聚國史〕 卷第三十二 帝王十二 天皇遊獵

十二月丙辰。遊獵於大原野。

二十四日(癸亥) 山階野に遊獵したまふ。

〔類聚國史〕 卷第三十二 帝王十二 天皇遊獵

癸亥。遊獵于山階野。

是歲

慈覺大師、諱圓仁誕生す。

〔慈覺大師傳〕

慈覺大師。諱圓仁。俗姓壬生。下野國都賀郡人也。其先。崇神天皇第一皇子豐城入彦。隨_二天皇勅_一。行治_二東國_一。及其苗裔。遂爲_二鄉人_一焉。延曆十三年。大師誕生。是日。紫雲覆_二屋上_一。家人無_二見者_一。時同郡大慈寺有_レ僧。名曰_二廣智_一。是唐僧鑒眞和尚第三代弟子也。德行該博。戒定具足。虚_レ己_レ利_レ他。國人號_二廣智菩薩_一。廣智經行之次。遙望_二紫雲_一。謂。嘉氣非_レ常。必可_レ有_二所應_一。便尋_二雲根所起之處_一。是檀越壬生氏家也。訪_二問之_一。家婦產_レ兒。廣智中心獨悦。不_レ告_二其祥_一。乃誠_二其父母_一曰。兒儻無_レ恙。必當_レ與_レ我。爾後數加_二教誨_一。苦令_二養顧_一。

○『日本高僧傳要文抄』卷二等にも同文が引用される。

平野社を造る。

〔二代要記〕

十三年甲戌（中略）今年始造_二平野社_一。見_レ式。

雜載

〔公卿補任〕

延曆十三年_{甲戌}

右大臣 正二位 藤繼繩 中衛大將。皇太子傅。十月廿七日叙正二位。

大納言 正三位 同小黒曆_{六十} 中務卿。皇后宮大夫。七月一日薨。贈

勲二等 從二位。勞五年。三木六年。中納言七年。

中納言 正三位 紀古佐美^{六十} 十月廿七日任。廿八日正三位

元三木春宮大夫左大辨右衛門督但馬

守。

從三位 神王^{五十} 十月廿七日任 (元三木)。彈正尹如元。下

總守。續日本紀云。十二年授從三位。拜中

納言。

壹志濃王^{六十} 十月廿七日任 (元三木)。兼治部卿。

參議 正四位下 石川眞守 太宰大貳。正月正四下。

從四位上 大中臣諸魚 正月從四上。伯。大將。式部大輔。

二月戊辰兵部卿。十月廿七日正四下。

藤雄友 大藏卿。左衛門督。正月從四上。

從四位下 同内麿^{三十} 十月廿七日任。左兵衛督。越前守。刑部卿

如元。

大納言眞楯三男。母從五位下安陪帶磨女。勝寶七年

丙申生。

天應元年十月廿三日從五下 (廿六)。二年閏正月甲子甲斐守。延曆四年

四月庚午左衛門佐。八月七日從五上。同月丙午中衛少將。十月甲戌兼

越前介。五年正月七日正五下。同月乙卯越前守。六年五月十九日從四

下 (卅二)。八年三月左衛土督 (守如元)。十一年六月刑部卿。十三年十

月廿七日任三木。兼刑部卿。

從四位下 藤眞友^{五十} 十月廿七日任。右京大夫。中務大輔如元。

右大臣是公二男。母正四位上行中宮大夫兼侍從兵衛督

橘朝臣佐爲四女。尚侍從三位麻乙朝臣。

寶龜十一年正月七日從五下 (卅九)。三月壬午少納言。天應二年壬正月

甲子衛土佐。延曆三年四月丁未越前介。四年正月七日從五上。十月甲

戊下總守。六年正月壬辰正五下。三月丙午右大舍人頭（守如元）。七年二月丙午中務大輔。十年正月戊辰叙從四下。十一年四月兼右京大夫。十三年十月廿七日任參木。

從四位下 藤乙叡三十一 十月廿七日任。兼左京大夫。

右大臣繼繩二男。母尚侍從三位百濟王明信。勝寶七年丙申生。

寶龜九年二月丙舍人。延曆元年六月兵部少丞。三年五月乙丑從五下。

七月壬午侍從。四年正月癸亥權少納言。五年正月戊戌從五上。六月丁

卯轉少納言。六年三月丙午右衛士佐。五月戊申中衛少將。十月己亥正

五下。七年二月甲申兼下總守。八年十一月大藏少輔。九年三月丙午兼

信乃守。同月壬戌兵部大輔。兼衛門督（侍從守如元）。十年十月十日丁

酉從四下。十一年四月乙巳右兵衛督（大輔侍從如元）。延曆十二年五月

辛巳左京大夫。十三年十月廿七日任三木。

○叙位・任官のこと本年十月二十八日條に見ゆ。

〔七大寺年表〕

延曆十三年甲戌

同帝

僧正善珠

少僧都行賀興福寺別當

少僧都等定

或本有大多本無大律師永嚴今年以後不見。法相宗。興福寺。玄昉良辨弟子。

中律師善榮辭歟卒歟

律師善上

永忠

善藻

施曉

善謝

十月二十三日。天皇自南考南下移恐脫京北京。名平安宮。

〔類聚二代格〕 卷二十 斷罪贖銅事

太政官符

応_四搜_三勘_言上_二飛驒_工事

太政官去延暦十三年符

右檢_三案内_一。太政官去弘仁五年五月廿一日下_三左右京五畿内七道諸國符_一。得_三飛驒國解_一。得_三飛驒國解_一。貢_三上丁匠_一。每_レ年有_レ數。事畢之日。規_三避課役_一。庸_三作他郷_一。積_レ年忘_レ歸。未_レ役不_レ絶。國郡陷_レ罪。加以遺留之輩相代奉_レ公。不堪_三其苦_一。逃去者多。遂使_三父子不_レ保。夫婦別_レ處。邑里爲_レ墟。道路希_レ通。望請。下_三知天下_一。勘責令_三言上_一者。右大臣宣。容_三止逃人_一律条立_レ罪。其飛驒之民。言語容_レ異_三他國_一。雖_レ變_三姓名_一。理無_レ可_レ疑。然則留住之奸。尤在_三所由_一。宜_三重下知搜勘令_一言上。若有_三容隱者_一。國郡官司。准_三太政官去延暦十三年符_一。科_三違勅罪_一。郷長隣保亦准_レ此科_レ之。雇役之家處_三杖一百_一。計_下自_三來日_一一人之功。日別徵_三新錢一百文_一。令_レ送_三彼後家_一。永爲_三恒例_一。以絶_三奸源_一者。職國承知。每年附_三朝集使_一言上者。從_二位行大納言兼皇太子傳藤原朝臣_三三守宣_一。下知之後。曾無_三言上_一。職國之司不_レ慎_三符旨_一。遂致_三此怠_一。宜_三嚴下知搜勘令_一言上。如猶不_レ悛、一准_三前符_一科_三違勅罪_一。

承和元年四月廿五日

〔笠置寺縁起〕

一、第五十代 桓武天皇御宇延暦十三年甲戌。南都之先德達登_三當山_一。始而被_レ行_三法華八講_一云々。當寺之法華八講者。日本第三傳之八講也。法華八講之事。

○笠置寺の法華八講については、延暦二年是歲雜載（『續紀史料』十九―210）條所引の『笠置寺縁起』参照。